

民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題

第 113 卷



南瀛佛教會會報

中國書店

南瀛佛教

三

七月號

NANEIBUKKYO

X 6



大日本
臺北
南瀛佛教會發行

南瀛佛教會會則

第一條 本會稱為南瀛佛教會，其本部漸置於總督府文教廳社會課內，支部應其必要設於地方，支部規則，別以定之

第二條 本會以本島在住之本島人僧侶，齊友之有志者及有位名望之外護者為寺廟、齋堂、神明會其他宗教團體而組織之

第三條 本會欲涵養會員之智德，而聯絡內地之佛教，冀圖佛教之振興開發島民之心地以爲目的

第四條 爲達本會之目的舉行如左之事業

- 一、開辦講習會、研究會及講演會等
- 二、調查關於宗教之重要事項及發刊機關雜誌

第五條 本會役員及職員之如左

- 一、會長 一名 推戴總督府文教局長
- 二、副會長 一名 推戴總督府文教局長
- 三、顧問 若干名 由理事推薦會長
- 四、理事 若干名 內一名推戴總督府文教局社會課社寺主任，其他由會員選舉，由會員選舉者任期三年
- 五、書記 若干名 由會長指名

依補缺而就任之理事者於前任者殘任期間在任

理事雖任期滿了後當俟至後任者就任仍行其職務

第六條 會長總理會務代表本會

副會長輔佐會長會長有事故之時可以代理顧問應會長之諮問

會員心得

- 一、本會會員宜遵守佛旨各正其名分
- 一、本會會員遵守會則會員互相敬愛常精勵業務涵養智德而盡會員之本分
- 一、本會會員特養大乘之教風振興愛國護法之精神以期無背於忠孝大義

理事受會長之命掌理會務

書記受會長上之指揮從事庶務會計

第七條 會長對於會員中有學識德望者命爲教師，使其布教傳道

第八條 本會會員分爲左之五種

- 一 通常會員 會費年額納金二圓者，但得每年二月九月二回分納
- 二 正會員 會費年額納金五圓者，但納期與通常會員同
- 三 特別會員 一時納付金五十圓以上者

四 名譽會員 碩學高德或於本會特有功勞者中推薦之

五 團體會員 會費年額納金拾圓之團體，但得每年三月九月二回分納

第九條 本會會員交付會員證及徽章，但徽章再下付之時當徵收買費

第十條 會員退會或除名之時，前納之會費，均不退還

第十一條 若欲入會者，明記住所姓名及職業等，以會員之介紹方可申込本會

第十二條 倘若會員有污本會之面目而急於會員之義務者或有除名

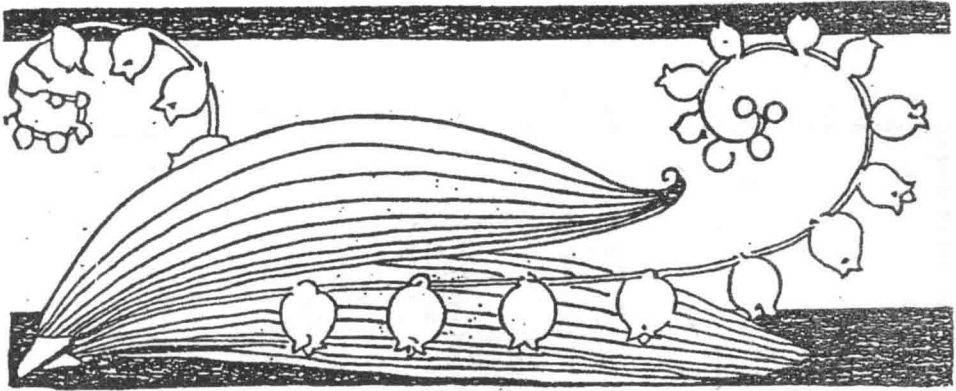
第十三條 本會每年三月開催總會，報告前年度中之會務及會計，決議算其他重要事項

第十四條 本會會員則非得交員三分之二以上之課金者不得變更



南
瀛
佛
教

昭
和
七
年
七
月
號



南瀛佛教第十卷第六號 目次

卷頭辭

講 演

宗教教育相關論……………忽滑谷快天……………一

傳戒演說錄……………江善慧……………五

世界的教星……………林德林……………二〇

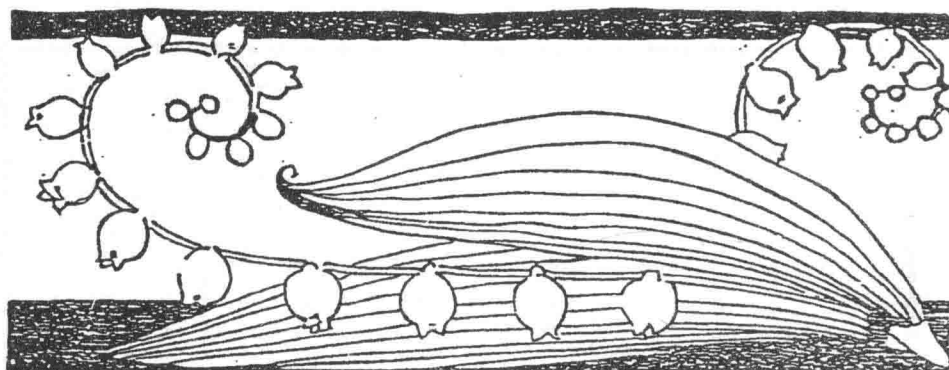
講 義

真心直說註解(四)……………林秋梧……………三

研 究

防遏性慾的方法……………鄭卓雲……………三

我爲佛徒對危險思想與帝國主義的態度……………鄭仁淨……………三



論壇

這箇問題是制度的罪、也是破戒的罪呢……………痴迷……………生……………言

對於臺灣佛教之希望……………道……………猷……………言

暨者聞法……………達……………禪……………言

禪話

禪門捷徑(一)……………林……………秋……………梧……………言

遊記

登基隆眉山記……………林……………玠……………宗……………言

遊清華山德源寺記……………吳……………錦……………章……………言

會報…………………………………………………………………言

教界動靜…………………………………………………………………言

島外新聞…………………………………………………………………言

後記…………………………………………………………………言

歡迎投稿

南瀛佛教的興衰、我們本島教徒都有負責承的、請
大家勿吝紙、墨、先來建設文字佛教、喚醒一般盲
論、稿限每月十五日交、歡迎大家紛投！

編輯部謹白

南 瀛 佛 教

第十卷 第六號

我佛世尊自降誕以至於茲、近三千年之久矣、然經如是年久、何以其教尚存耶？蓋其教也尊嚴無上之教、其理也無上正等之理、其律也萬行莊嚴之律、可謂世界無類之宗教也。然時至今日、竟詆者彌衆、尊者愈寡、嗟者日多、崇者月少、此曷故哉。蓋一方以暴戾狂熱、罔自詆毀、一方以腐敗僧伽佛徒、媒介招致之故也、嘗遍遊島內寺院齋堂、曾與僧伽佛徒交遊、其中當鳴鑼振鐸固儼然僧伽佛子也、當合掌頂禮、亦肅然僧伽佛徒也。當座談時也、亦滔滔文理整然。然而顧跡其用心、察其舉動、頗多窮奢極侈、其衣也綢緞紗羅、其出門也人力、自動、嗟呼、斯何爲耶、斯何舉耶、在常人出之、猶尚不可、矧身爲僧伽宜當節儉、而可長此糊塗乎。昔百丈祖師、一日下牀、一日不食、日本道元禪師、御賜紫衣一生不着、染衣始終。以其宗風日盛、爲萬世之師表。古之祖師也如此、今之僧伽也如彼、是以招人詆毀、被人輕侮、亦有以也。夫僧伽者、傳佛慧命、紹佛法燈、猶若佛之子也。爲佛子者、譬若人之子也。爲人子弟者、自應束身、步武父兄、承家克業、裕後光前、揚名後世、以顯父母。豈爲佛弟子者、獨不束身步武、承克光裕耶。奈何一任非爲、自謂文明維新。自言改革。自認莊嚴。修行自命。以潛我佛而不稍顧哉。此佛教所以日益頹靡、觸處受人詆辱者、此之故歟。由是觀之敗壞佛教者、良由僧伽佛徒之所招致、照然若揭。然則僧伽佛徒可謂詆辱佛教之媒介、非厚誣矣。願世之有心宏法衛道者固宜自重。若有不當行爲之僧伽、加之注意。而有以懲之、覺之、糾之、正之可耳、挽既頹之風、矯既染之習、俾佛風而再振。爲佛教徒者、互相自愛、共同振作、是吾人之望。願島內之佛徒各自猛省焉。



宗教・教育相關論

文學博士

忽滑谷 快天

宇宙人生は一大生命の自己創造及び進化發展の活歴史である。これが吾人の人生觀で同時に佛教の宇宙人生觀であると思ふ。何となれば、佛教の出發點は造物主なる神を否定し、又靈魂を否定し、普通宗教に於て最も重要として居る造物主なる神竝に靈魂不滅の二大信條を否定したものである。既に造物主を信じないことをすれば、萬物は因縁所生と稱して、原因と之れを助ける縁とに依つて己れ自身を組織し、統一し、進歩發展しつつ、活動するものと考へざるを得ない。佛教の宇宙人生觀は、因縁所生といふ因果の關係から成立つのであるから造物主に依つて、萬物は造化してゆくものと考へざるを得ない。然れば萬物は死物に非らず又盲目的のものに非らずして、一個の生命を有して、目的に向つて進む行く所の活動體と考へざるを得ないのである。佛教思想が發達し天地萬有を以て一大生命なる佛の活動と考へるに至つたのは、その出發點から當然歸納さる可き結果であると思ふ。又靈魂を否定したる以上は、心身の外に超然たる靈魂を認めないのであるから自然心身不二の生命を認めざるを得ない。従つてその生命は宇宙的なる生命と同一の存在と考ふるが當然である。即ち天地の生命草木の生命、禽獸の生命、人間の生命、皆同一の生命と考へざるを得ない。斯様にして宇宙人生は一大生

命の自己創造及び進化發展の活歴史であるを考へる事が出来る。換言すれば宇宙人生は佛なる大心靈の活動である。

抑々生命なるものは自己を創造し發展せしむる力のあるものである。一例を擧ぐれば、人間の生命を宿せる單細胞の如きは、母の體內にあつては極めて簡單なるものであるが、他の力を借らずして、細胞自からその創造力を運用して人間を生ずる即ち極めて複雑にして微妙なる身體を有する生物となるのである。故に生命は自己創造及び進化發展の活動を常に營むものとして考へられる。而して宇宙人生は、この一大生命の自己創造及び進化發展の活動を考へて少しも差支くないと思ふ。

一

宇宙と人生とは一大生命の分化であるから別々に考ふる事は出来ない。然れども假に宇宙と人生とを概念的に區別して見れば、宇宙は生在壞滅の循環をなして進展してゆくものであり、人生は生老病死の循環をなして進展するものである。固より人生と宇宙とは不可分のものではあるけれども、假に區別して考ふれば宇宙的なる世界は生じたり、暫らくその形を保つて住したり、又破壊したり、滅したりして絶えず新陳代謝して、始めもなく終りもなく進展しつゝあるものである。人生もこれと同様、生老病死の循環があつて絶えず生れたり死んだりしつゝ親の生命は子の生命に生れ變り、子の生命は孫の生命となつて復活し更生しつゝ新陳代謝が行はれて居る。是れ宇宙人生に生命ある所以にして、化石的に沈滞せざるはこれが爲である。宇宙と人生とが別々に考へらるゝ如く、社會と個人とが亦不可分のなれども、假に社會と個人とを區別して考へる事が出来る。

個人を取り圍む所の社會及び自然界を環境と名づけ、環境と個人とを假に別のものとて考ふる時は、何人も絶えず環境に順應せねばならない。何と云へば、環境は時によつて個人の爲めに利益となる場合もあり、或は損害を生ずる事もある。故に個人は絶えず環境に順應して、その生命を十分保護發達させなければならない。

教育なるものはこの順應を完全にするための指導である云ふ事が出来る。例せば火の發明は文明の基礎であつて、火を利用することに依つて文明大いに發達したものである。然れども小兒は手をもつて火に觸れ火傷をする事がある。これは環境に順應が出来ないからである。教育は小兒に火の利用を教へ、小兒をして火傷せしめないやうに指導すべきである。又文明世界の諸機械の根原は車の發明に基づいて居る。如何なる機械でも何處かに車のないものはないのである。しかし之を利用することは小兒には困難の事である。そこで之を指導して之を利用せしむるが如きも亦教育の力である。其の他寒暑に對する順應、晴雨に對する順應、近くは父母に對し兄弟に對し、朋友に對し、社會に對する順應を指導するのが教育であるに相違ない。

三

元來生命は自然に順應作用を有つて居るのである。例せば、生物の良能の如きがそれである。我等の血液には解毒作用、抗毒素を作る作用、食菌作用、凝集作用等があつてその力によつて、有毒微菌の厄を免かれたり負傷を治癒したりする力がある。斯くの如き良能は無自覺にして自然に行はれて居る順應現象である。しかし乍ら斯くの如き無自覺なる良能のみにしては順應作用が不十分である。故に今一步進んだ本能作用を現すに至つた。本能には自覺があつて意識的であるから、良能より一層都合よく環境に順應することが出来る。大體に

於て本能の満足は、生命を安全にしてその生活内容を豊富ならしむるものである。例せば飢ゑて食を摂り、疲勞して眠るが如き本能の満足は生命を安全ならしむるものである。又好奇心を満足せしむる爲めに事物を研究する如きは學問發達の根基であつて、生活内容を豊富にする力がある。その他所有本能、創造本能、遊戲本能自己擴張本能等種々様々あるが、大體に於て本能の満足は、生命を安全にし生活内容を豊富にする力がある。然し乍ら本能の満足には常に快感が伴ふ。不満足には不快の感を作ふものである。本能の満足に快感が伴ふために、その快感を得るを主として屢々本能の眞の目的を忘るゝ事がある。即ち性慾満足に就て言へば、快感を伴ふ爲めに性慾の眞の目的を忘れて、變態的病的の性慾となる事がある。つまり主なる本能の目的と、その満足に伴ふ所の快感とを混同じて、從屬的のものを主とし、根本的のものを従とする過ちを生ずるのである。飲食も亦斯くの如く、飲食に附隨する所の快感を得る爲めに、飲食して屢々身體を害する事がある。是れ即ち食慾なる本能の目的を忘れて、從屬的なる快感を得んとするから、變態的病的となるのである。富を得るも亦斯くの如く、所有本能の目的を忘れて、富を蓄積する愉快を求むるが如き、これ又病的變態的のものとなるのである。小兒の時は自己擴張の本能が極めて強いものであるから、物を破壊する事を好み、他の小兒を壓制したり、虐待したり、横暴を逞うする事を好むものである。これ亦本能の濫用と稱すべきものであつて、本能の満足は指導、訓練を要すべき筈のものである。

四

指導訓練は本能をして、その目的を誤らざらしめ順應現象を圓滑にする爲めに必要の事である。この指導訓

練は教育に俟たねばならぬ。然れども本能を抑壓して之を制止することは、又一種の弊害を生ずる恐れがある。本能の抑壓は不自然であり、變態的な病を生ずる憂がある。又一方の本能を制止すれば、他方面の本能が爆發する事がある。支那の宰官の如きは、性器を斷れたる不具者であるから、當該本能を無理に制止されてある爲め、他の方面に爆發して宮中の綱紀を紊すやうな事が屢々あつた。又東洋西洋の昔の宗教家が獨身生活を營む爲めに、夢からざる弊風が行はれた事實もある。今日に於ても、結婚せざる老嬢の如きは變態的病苦に囚はれて居る人が澤山ある。又不遇なる社會の人々が自暴自棄に陥るが如きも亦これと同様の弊害である。然れば教育上本能は快不快の氣分に誤まられざるやう指導訓練を必要とする譯である。本能は元來盲目的のものであり、その眞の目的を意識せざるために、環境に順應するに不充分である故、盲目的ならざる知能を發達せしめて本能の目的を明らかに知る事を要するのである。

知能は本能と比較すれば、順應現象を一層完全ならしむる力がある。何となれば知能は本能の目的を指示するのみに非らずして、環境を作り、或は環境を取捨選擇する事によつて、愈々その目的を誤まらざる事が出来る。所謂學校教育は智能の指導訓練による事は言ふまでもない。知能なるものは過去に於ける人類の経験を藏めたる寶庫であるからこの寶を得んが爲めには、學問をして知能を啓發しなければならぬ。學問の中には單に先覺の経験を收めて居るのみに非らずして、古聖人の理想と德行なども含著して居るものである。又天地の秘密を打開する鍵子を與へらるもので知的教育の有効なるは言ふまでもない。

五

職業教育道德も教育も知的教育も同様、環境に順應する道を教ふるに他ならざるものである。斯くして教育は吾人が社會・自然界との環境に順應するやう、指導訓練をするものと言つて差支へないと思ふ。然るに知的教育の弊害も尠くない爲めに之に對する非難の聲も擧げられ、之を扱ふ可き幾多の方策も考へられて居る。然し乍ら世間一切のものが皆弊害のないものはないので、知的教育のみ弊害があるのではない。故に知的教育の弊のみを擧げて教育そのものを論難するのは穩當でないと思ふ。

今日政治家の鬭争の如きは極めて本能的にして護國安民の大義を忘れ、本能的に争鬭に打ち勝たんと熱中して居る如く見ゆるは大なる弊害にして知的教育以上の弊を認めざるを得ない。又議會に於ける多數決制度の如きは、最も不合理な弊である如何にすれば、多數決は人間を均一平等に見做したものである。均一平等であればこそ三人の決議よりも五人の決議は有効であり、五人の決議より十人の決議が正當と認められる。即ち人の智慧を一尺と假定して、三人にして三尺、五人にして五尺、十人にして一丈といふやうになるならば三人より五人、五人より十人の決議の方が正當であり、倂つて居る。つまり數を以て正不正を判決する標準とする事が出来る。然れども人間は平等均一のものでなく、認識力に於ても、判斷力に於ても非常に相違があるもので、一尺の智慧の人もあり、十丈、二十丈の智慧の人もある、故に十人の決議も五人の決議より劣る事があり、百人の判斷よりも一人の判斷の方が正當である事が屢々ある。で一人を均一平等と見たる多數決は不合理であり選舉法の精神にも矛盾して居る。

選舉法は人間を均一平等と見ずして、人には適不適ありて差別を認める上に立脚して居るものである。即ち議員に適したる人、適せざる人を認めて、議員に適した人を選擧するのが選舉法の精神である。萬人が萬人な

から議員に均一平等に適して居るものなら抽籤によつて足る可きである。然し適不適があればこそ選舉が行はれる。この選舉法の精神は、人間の差別に立脚して居るものであるにも拘らず、多數決はその反對に人間を均一平等とするのであるから、非常な矛盾と言はなければならぬ。この矛盾あるがため多數決が弊害の原因となる。即ち多數を得んが爲めには政權を濫用したり、或は金力を應用したりして議員を買収する必要を生じて来る。元來人格なるものは賣買すべからざるを原則とする。若し議員が買収されたミすれば、人格を失つたものであつて動物ミなるのである。動物は皆賣買するミが出来然れば買収議員の多數は、人間の多數に非らずして動物の多數と言ふミが出来来る。衆議院を動物園といふが如きはかゝる弊害より起つた事であらうミ思ふ。

六

次ぎに經濟界に於ても、種々の弊害は認められる。勞働者にも弊害があり、資本家にも弊害がある弊害のない所は全くない。マルクスが『勞働價值論』を唱道して、「事物に價值の生ずることは専ら勞働に依るものである。即ち自然に山林の中にある樹木は何等の價值もないが、之に勞働をかけて伐り出し、薪ミし、材木ミすれば始めて價值を生ずるが如きである。斯くして事物の價值は、勞働によつて生ずるにも拘らず、勞働させる資本家が利益を壟斷するのは、勞働者より利益を掠奪搾取するのである。」ミ論じて居るが如き、その議論の誤まれる事は一目瞭然である。何ミなれば、如何に多くの勞働をかけて作り上げたる物品ミ雖も、之を用ゐて役に立たない時には三文の價值もないのである。即ち價值は使用に依つて生ずるミいふ事實を否定する事は出来な

い。而して勞働は價值を生ずる一因たるに過ぎぬのである。されば勞働價值論の如きは、マルクス自身の要求を満足させ、所信を實行するに必要な理論を、無理に組立てたものと考へざるを得ない。大體共產主義の議論は、不遇なる下層社會の人々の要求を満足させ、その所信を斷行せんとする必要なる人生哲學とも稱す可きものである。畢竟社會を改造する方法の一つではあるが、最善最良の方法ではない。たゞ彼等の信ずる所を扮飾せんとして、哲學的な理論を述ぶるに過ぎないのである。斯くの如くなれば、世間一切のものに弊害のないものは一つもない。故に弊害があるからして知的教育に反對するのは正當ではない。然し既にその弊害を認めたる以上、知的教育を補助す可き宗教々々を必要とするの聲が、教育者間に聞かれるのも無理からぬ事である。

然し乍ら宗教にも亦、弊害が山積して濫りに之を學校教育に施す事は出来ない。

七

前に述べたる如く、既成宗教も亦弊害山の如くであるから、濫りに教育上に採用することは出来ない。宗教の中、淫祠邪教ミ稱せらるゝものは勿論、低級なる宗教は其形式も精神も教育上に採用すべきものでない。既成宗教の中には非學術的な信仰を鼓吹したり、人倫道德を輕視したり、功利主義や利己主義を唱道したり、隱遁主義や厭世主義に傾いたり、又現世を否定して未來主義を尊んだり、宗儀宗法の形式主義に墮したりするやうな宗派は教育と矛盾衝突する虞れがある。是を以て教育に採用せらる可き宗教は、宗教の本質そのものでなくてはならぬ。宗教の本質とは如何なるものかと言ふに、余は下の如く言ひ表はしたいと思ふ。即ち宗教は